東京音楽大学リポジトリ
Tokyo College of Music Repository

共同研究参加の感想

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-01-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 坂崎, 則子, Sakazaki, Noriko メールアドレス: 所属:
URL	https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/1434

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

教員コメント

共同研究参加の感想

坂崎 則子

はじめに

ある楽曲について、その背景を探ってみようとするとき、そこには実に広大な世界が広がっていることをあらためて認識できたことが、今回の共同研究に参加しての収穫であった。渡辺先生が示される社会学的な多方面に渡る視点は、院生達にとっても大変刺激的であったことであろう。楽曲に対する村田先生の深い見識、また、音楽と絵画との関連についても実に示唆に富んだ発表を聞かせていただけた。実技の先生方たちからも、それぞれの実体験からの生き生きとしたお話を伺うことができて、院生達と共に大変実りある時間を過ごすことができた。

今年度は 2020 年がベートーヴェン生誕 250 年に当たっていたこともあって、共同研究の時間は「第九」が核となった。学生の参加メンバーは音楽教育専攻 1 名、実技専攻が声楽 3 名、弦楽器 1 名、管楽器 1 名で、音域や演奏法、背景など、各自が自分に引き寄せた実体験に基づいたものから出発して、そこからそれぞれの考察が展開されていった。

歌いづらい「第九」、それでも歌い継がれている「第九」

声楽専攻の院生達からは、主に「第九」が音域やデュナーミクなど、歌う時に困難な箇所がいくつもあることが挙げられていた。初演時からこのような意見は出てきていたのだが、それに対してのベートーヴェンの答えは「練習すればできる」というものだった。歌い手が演奏する際、音域的、技巧的に至難なパッセージであっても、ベートーヴェンにとっては表現に「必要だった」ゆえに書いたのであろう。専門の歌い手にとっても技術的に困難の極みのような箇所はあるが、それを克服しようと苦しんで乗り越えたときに思いがけない高みに至ることが出来て、そこで得られる高揚感は格別だと言う意

見もあった。暗闇から光へ、苦しみを経て喜びへというのは、ベートーヴェンの楽曲を貫く傾向と言える。

さらに、渡辺先生から、「日本といった異文化の地において、西洋音楽の歌詞を歌うという活動がどのように位置づけられ、どのような形で作品が受容されてきたか」という観点が示され、声楽専攻にとっては大いに考えさせられる契機となったに違いない。どんなに語学力を磨いても、外国語の歌詞をすべて日本語と同じように理解して演奏することが可能なのかということについても色々な意見が交わされた。

以前、本学にアメリカ人留学生が声楽専攻の大学院生（バリトン）として在籍していた。この学生が山田耕筰の「この道」を演奏した時、日本語の歌詞がしみじみと伝わってきて、そこにいた聴き手たちはその演奏に大変心打たれていた。どうやってこの曲にアプローチしたのか尋ねたところ、日本語は彼にとっては外国語であるので、一語一語徹底的に意味を調べて、それを深く考えて自分の中に落とし込み、意味するものを感じながら発音し、共感するところまで消化して歌うのだとの説明があった。言葉で説明するとこのようなものであったが、きっと説明しきれない部分がもっとあるであろう。それでも苦労の片鱗は理解できた。声楽専攻の学生達も外国語の歌に対して、それぞれ苦労してアプローチしているのだと思うが、「理解する」ところまでは行き着いても「共感するところまで」いくというのは並大抵のことではない。歌詞と音楽の結びつき方、旋律や魂を揺さぶる響きなど、音楽そのものの力もあるので、先ずはそこで大いに動かされてしまう。どこまで行けば本物の「共感」に辿り着けるのか、この点については、特に声楽専攻の学生にとって生涯に渡って抱え続けていく問題なのであろう。

歴史に残るということ

ベートーヴェン生誕 250 年記念の年ということで、昨年はベートーヴェンの曲が盛んに特集されていた。その中でもアジアでの「第九」初演の地、鳴門市の板東俘虜収容所での演奏会について、テレビ番組などで取り上げられていた。この共同研究でも、音楽教育専攻の院生から詳細な報告が寄せられた。この演奏会は「第一次世界大戦後、しばらくの間は忘れ去られていた」とのことであるが、地元の高橋春枝さんという方がドイツ兵俘虜を供養し続けたという、か細い糸が手繰られ、次第に地域活性化、観光など幅広い影響があったことなど、実に興味深い事例であった。

これは極めて特例と言えるのであろうが、ある楽曲がずっと伝えられ続けていくということは実は大変難しいのではないかとの思いを新たにした。ベートーヴェンの「第九」初演にまつわることについても、この論文集に声楽専攻の院生による報告があった。ベートーヴェンの場合は当時すでに有名作曲家であり、資料も豊富で、広く研究され、演奏され、世界的財産となっている。「第九」はフランス革命時の熱気に満ちた時代が生みだしていることは周知のことである。ベートーヴェン唯一の救出オペラ《フィデリオ》と「第九」は、どちらの曲も高い評価を得て演奏され続けている。この二つの曲の合唱のクライマックスに「素晴らしい妻を得たものは一緒に喜びの声を上げる」と言う共通の歌詞があり、《フィデリオ》と「第九」はベートーヴェンの意識の中で強く結びついていたことも分かっている。交響曲と合唱、ひいてはオペラがベートーヴェンの中では一つの世界として鳴り響いていたことであろう。

渡辺先生ご指摘のように、曲に内在する「コミュニティソング」としての特性が、フランス革命時の在り方とある部分で通じ合うものがあり、日本でも歌い継がれる原動力となっている。いつの時代にも苦難の種は尽きないが、昨年来の全世界的な苦しみの時、今は特に「第九」の意味が強く迫ってきているのではないか。

「第九」は、日本では年末の慣例行事のような存在になっていて、昨年来、演奏会が軒並みキャンセルとなって、多くの人々が翼をもがれたような思いを味わった。同じ空間で演奏する時、歌う側も聴く側も、知らない人が一緒に心身を震わせる、人間の「同調能力」とでもいうものが如何に力をもつものか、いま、改めて皆が考えているのではないかと思う。

結び

今年度、思いがけなくオンライン授業となって、最初は大いに戸惑っていたが、自宅に居ながらにして、皆さんの発表を聞くことが出来たことは本当に有難かった。異常事態を経て、学校の授業も新しい形態が模索されていくこととなろう。いつの日か、このような転換点に立ち会えたことは得難いことだったと振り返る時がくるのであろう。

（本学教授　音楽学）